中学生の友人関係における自己効力感と対処行動

小　森　千　世

問題と目的

青年期において，友人と良好な関係を保つことが重要な課題となっている。しかし近年青年たちの友人関係が希薄になっており，表面上は明るく楽しげに振る舞っていても，自分の悩みを打ち明けたり，お互いの欠点などを指摘しあえるような一歩踏み込んだ関係を求めながらも持てないでいると言われている。さらに中学生の学校生活におけるストレッサーとして，友人関係が挙げられるという報告もある。青年期の課題としても，厳しく深刻な現在の友人関係の中でも，友人との間に生じた問題にどう対処するかは，中学生の生活にとって重要なことであると考えられる。

本研究では中学生の友人関係に焦点をあて，友人関係において生じた問題にどのように対処をするか，また実行された対処行動にどのような要因が影響しているのかを検討することを目的とする。

対処行動に影響を与えている要因として，相手との関係という点から，先行研究からの知見を基に，相手との親密さ・勢力関係・関係の回復性を取り上げた。相手との親密さについては，相手とどのくらい親しいかによって用いる問題の解決法が異なっており，相手と親しいほど協同的な解決法を用いているという知見がCaplanら（1991）や藤森（1989）によって見出されている。勢力関係については，影響する側・影響を受ける側という認知が問題の解決に影響を与えているのではないかという知見が，Falbo（1980）や藤森（1989）研究から見いだされている。関係の回復性は，ストレスに対する個人の回復性・傷つきやすさという考えを，関係にも応用できるのではないかと考え，新たに対処行動に影響を与える要因として取り上げることにした。

また，対処行動を遂行する当人側の要因として自己効力感を取り上げる。自己効力感は今まで対処行動と関連付けて考えられていなかった。自己効力感は，あることがこれくらいまではできるであろうという効力期待であるが，このどのくらい自分がうまく出来るかという認知が，行為の選択や実行の主要な決定因となっているという知見が見出されている。また実際に行う行動だけでなく，どのくらいの努力をするかという対処努力などにも影響を及ぼしうるとされている。このような自己効力感は，友人関係での問題の対処行動にも影響を及ぼすのではないかと予想される。

方　法

被調査者は，中学1・2年生の男子164名，女子175名の合計339名である。各教室において授業時間の一部の時間で，担当教師の手による集団質問紙調査を行った。一部調査校の都合により，生徒が各自自宅に持ちかえり，一週間の回収期間をおいて回収された。回答は各自のペースに任せ，回答に要した時間は，およそ15～20分であった。

仲間関係での自己効力感を測定するために，Wheeler & Ladd（1982）のCSPI（Children's Self-efficacy of Peer Interaction Scale）の中から10項目を選んで用いた。この項目は，相手の意図と自分の意図が対立しない葛藤なし項目と，対立している葛藤項目のそれぞれ5項目からなっている。実際に友人関係で生じた問題とその対処については，1. その出来事，2. 感情，3. 実行された対処行動，4. その対処行動をとった理由，5. 実行されなかった対処行動，6. 後に生成された対処行動，7. その後の相手との仲，8. 相手との関係（親密さ・関係の回復性・勢力関係）の8項目を質問した。

1.～7. は自由記述であるため，基準に従ってコード化した。3.・5.・6.は，藤森（1989）の葛藤解決ストラテジーの名称・定義を用い，さらに2種類を付け加え，15種類に分類した。さらに15種類のストラテジーを，コミュニケーションの促進性の次元（促進／抑制）と，解決の方向性の次元（個別／協調）によって分けられる4つのタイプに分類した。コード化は，本研究の仮説を知らない大学院生2人によって分担して行われた。分類の一致度は77%であった。

結果と考察

友人関係での問題への対処行動で一番よく用いられていたタイプは，コミュニケーション抑制・個別型（56%），問題についてその存在を明かにせず，自分一人で問題を片づけようとするタイプである。その他の3つのタイプの抑制・協調型，促進・個別型，促進・協調型は同じ割合で現れていた。抑制・個別型の対処行動が用いられた理由として考えられるのは，理由の項目でも挙げられていたが，問題事態が些細なことで，「どうでもいい」「相

手にする気がおこらない」といった気持ちになっているため，敢えてその問題について表面化させる必要がなかったことが挙げられよう。また問題を表面化させようにも，相手がその場に存在しないというタイプの問題が取り上げられていたことも考えられる。よく挙げられていた出来事で「下校の約束が果たされなかった」というものでは，相手が存在しないために表面化できない。問題とされる出来事の種類によって対処行動がかなり影響を受けていることが推測される。この事は，実行されなかった対処行動や後に生成された対処行動のタイプにも当てはまるであろう。

対処行動に影響を与える要因として挙げられた，相手との親密さ・関係の回復性・勢力関係と実行された対処行動の関連を見るために，分散分析を行った。その結果，対処行動のタイプ別で差がみられたのは，相手との勢力関係のみであった（$F(3,196)=5.63$，$P<.001$）。コミュニケーション促進・個別型を用いた場合に勢力得点が高く，コミュニケーション促進・協調型を用いた場合に勢力得点が低くなっていた。本研究での勢力得点は，相手のいうことを聞くことが自然だと考える正当勢力と相手は自分の理想の人であるという参照勢力を測定したものであり，勢力得点が低いほど，相手のいうことを聞くのが当然だという考えを持つ傾向にあることになる。コミュニケーション促進・協調的解決を目指すことは，相手のいうことを聞くのが当然という考えを反映している，逆にコミュニケーション促進・個別型の対処行動は，相手のいうことを聞こうというより，相手が自分のいうことを聞くことが自然であると認知していることを反映しているようである。

対処行動に影響を与える要因として，対処行動を行う当人側の要因として挙げた自己効力についても，同様に分散分析を行った。しかし対処行動のタイプ別で自己効力感得点に差は見られなかった。実行する対処行動のタイプに，自己効力感の個人差は反映されていないことになる。先行研究での行動の遂行や対処努力との関連が強いという知見とは一致しない結果となった。このような結果となった理由として，自己効力感の測定の問題が考えられよう。自己効力感の測定は，まだそれ自体が研究課題となっている。本研究で用いた尺度は，仲間関係での説得的駆け引きについての自己効力感を測定するもので，相手に対してどれくらい主張できるかという面についての自己効力感であった。それ自体は本研究で扱った問題への対処行動と関連は深いと思われる。元の被験者が小学生であったことから，中学生の友人関係とはまた異なる側面があったのではないかと思われる。もう一つの理由として，先行研究との場面の違いが考えられる。先行研究では主に治療場面を扱っており，対処努力を強く求められ，さらに本人の治療意欲も充分あったと推測される場面であった。一方本研究では，友人関係での問題への対処行動であり，努力をどこまでするかは本人次第であると考えられる。挙げられた問題自体も些細なことであり，それほど対処への意欲が高くならない場面であったと考えられる。

自己効力感そのものについては，葛藤項目と葛藤なし項目で比較すると，葛藤項目において有意に得点が低かった（$t(225)=14.9$，$p<.001$）。周りの状況と自分の気持ちが食い違っているときに，自分の気持ちを表明することに対して効力感が低くなっている。周りと違わないことを大切にして，周りと違うことは口にするのが難しいと感じられているようである。特に自分以外の周囲の人数が多いほど，この傾向は顕著である。自己効力感の測定項目の内容以外にも，回答や感想の中からも，自分の気持ちを相手に伝えられない姿がうかがえた。

総合的考察

対処行動に影響を与える要因として，相手との関係という点から親密さ・関係の回復性・勢力関係を，対処行動を行う当人側という点から自己効力感を取り上げた。分析の結果，対処行動のタイプ別で差が見られたのは，相手との勢力関係のみであった。この結果から，対処行動に影響を与えるのは，行動をする当人側の要因でなく相手との関係の要因であると結論付けるのは，早計であると思われる。先述のように，測定項目の数や内容の問題がある。これは自己効力感の測定だけでなく，相手との関係についての質問項目にも当てはまる。測定尺度の改良が，今後の課題となろう。また，質問紙調査の限界もあり，以後もっと丁寧にデータを得るには面接調査が望ましいと思われる。対処行動の遂行には，様々な要因が複雑に絡み合っていることが推測されるので，データの収集や，要因の同定・測定をどのように進めるかが重要になってくると思われた。